

主催：愛知県立大学 多文化共生研究所  
愛知県立大学 地域連携センター

# 『虹の戦士』語り Live

語り：坂口 火菜子

音楽：じぶこん



『虹の戦士』:

インディアンに古くから伝えられてきた物語。1991年北山耕平によって翻訳され、もともと「スピリットの帰還」という原題を持つこの物語は、カナダ最大の先住民民族クリー族にかつていた「光の瞳(アイズ・オブ・ジ・ファイヤー)」と呼ばれた老婆が残した予言的な物語である。

現代を生きる一人の少年が、自分の中に眠る『何か』の存在に気づき、探す旅。地球が病んで動物たちが姿を消し始めるまさにその時、みんなを救うために虹の戦士が現れる。この諺がもとになって生まれた物語といわれている。

参加無料、事前申込不要です。 直接会場へお越しください。

日時：平成 29年 1月 27日 (金)

12:50~14:20 受付開始 12:00

場所：愛知県立大学長久手キャンパス  
L棟(講堂)

問合せ先：愛知県立大学研究支援・地域連携課

E-mail [renkei@bur.aichi-pu.ac.jp](mailto:renkei@bur.aichi-pu.ac.jp)

TEL 0561-76-8843



## 「虹の戦士」開演によせて(北山耕平翻案『虹の戦士』あとがきより抜粋)

### 愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 谷口智子(文案)

私たちは、現在、自分たちの生活を見直すべき時代を生きている。この時代は、アメリカ・インディアン信仰においては、空の星たちの位置の変化によって、1960年代後半に始まったことが確認されており、劇的な変化は、活動に激しさを加えつつ世紀を超えて、21世紀の最初の20年ほどを支配することになっている。アメリカ南西部の高原砂漠に暮らすホピ族はこれを「偉大なる浄化の時」と呼んできた。ホピの教えによれば、灰の詰まった瓢箪が二回地球を振るわせた後、遠からずして浄化の時が始まり、ホピと純粋な心を持ったインディアンたちが力を合わせて、世界をよりよいところへとつくりかえていくことになるだろう。この「灰の詰まった瓢箪」とは、「広島と長崎に落とされた原子爆弾」を指す。

日本人は「ルーツを喪失したインディアン」なのだ。私たちは「あらかじめ母なる地球との絆を失ってしまっている」のだ。そして「縄文時代のライフスタイルを今に伝える世界の先住民に残された教えと生き方を学び直すことで、もう一度、日本列島と自分とを繋ぐこともできるはずだ」と。

日本人は、日本という国家を愛するほどには、日本列島を愛してはいない。その結果、日本列島における自然は、ことごとくゴミに覆われて、もはやほとんど残されていない。その昔、朝鮮半島やアジア大陸からの帰化人によって、「大きな八つの島」と呼ばれた大きな美しい島々は、二千数百年を経て、今、見るに忍びない姿を曝している。自然のままの浜も守りも山も沼も、もうない。20世紀には、あらかた原生林も消え、水も黒ずみ、空気も汚染した。川には死んだ魚が浮き、空からは鳥が落ちた。さらに世界中から食料や化石燃料や森林の気を切り倒して作る紙などの自然資源を大量に輸入することで、世界各地の先住民から土地と生きる権利や環境を奪い、精神的物理的様々なレベルにおける汚染を地球規模に広めてきた。当然ながら、母なる自然は日本列島から潮が引くように姿を消しつつある。気がついた時には野生の植物や動物の大半がすでに消えていた。今生まれつつある赤ん坊は、ダイオキシンの汚染された母乳を飲んで育つのだ。これは「地球が病んでいる」ことの証である。こうした地球の病に関わる問題は、私たちが私たちがたらしめている生き方と密接に関連するのだ。だから、私たちは、地球の病を癒すために、自分たちの生活を根本的に見直さなくてはならない。

世界各地の先住民の教えが伝えている。地球が病んで、動物たちが姿を消し始め、人々が健康を失って愚かな振る舞いを始める頃、つまり、地球の変化が激しくなって「偉大なる浄化の時」が始まると、伝説や、物語や、古い教えや、儀式や、神話や、太古の部族の風習などを、しっかりと守り続けてきたものたちの時代が到来すると。地球上の生命あるものたちの生存の鍵を握っているのはその人たちだ。日本列島でも例外ではない。「虹の戦士」とは、その人たちを指す。虹の戦士たちは、誰からも命令や指示を受けない。戦士は、「指示や命令がなければ動けない兵隊」とは全く異なるからだ。虹の戦士とは、自分が好きになれるような世界を作るために、何かを自発的に始める人たちだ。正義と、平和と、自由に目覚め、偉大なる精霊の存在を認める存在。日本列島は、母なる地球は、その人たちの到来を必要としている。

「虹の戦士」たちは、この教えを地球に生きる人々に広めることになるだろう。偉大なる精霊の指し示した生き方を実践し、今の世界がその教えに背いているために、私たちの地球が病んでしまったことを伝えていく。自分たちが好きになれるような世界を作るために、病んでしまった日本列島を癒し、もう一度地球を美しくするために、何をすれば良いのかを理解して、力強い行動をとることだろう。

世界各地で生き抜いている先住民たちを、地球環境に対する意識の高まりと、私たちが「文明」と思っているものに対する根本的な疑問の投げかけを受けて、1970年代頃から「地球の守護者(キーパー・オブ・ジ・アース)」と呼ぶようになっている。この背景が、1960年代に始まるアメリカ・イン

ディアン（注）の精神復興運動の高まりと、直接間接にそれに影響を受けた様々な政治的、社会的な動きにあることは間違いない。地球が大きな変革の時、ホピ族が、「浄化の時」と呼ぶ時代に入ってからすでに30年が経とうとしているが、その間に興隆した事故と社会と地球の癒しを求める人間性回復運動、価値転換運動、愛と平和の革命、地球意識開発運動、環境保護運動、地域内自給自足運動、持続可能社会の創造運動、ニューエイジ運動など、今の私たちの関心事に連なる大きな潮流の底には、常にアメリカ・インディアン的な物の見方や考え方が、存在し続けている。白人化教育を受けないで育った最後の世代に属するスー族の偉大なメディスンマンであるレイム・ディーア（注）は、1972年にアメリカで出版されたその遺言とでもいえる本のなかで、人類が絶滅の危機に瀕しているという現状認識を踏まえた上で、新しい地球の蘇りについて、「汚染も、戦争もない、まっさらな新しい地球を、呼び戻さなくてはならない時が来ているのだ。そうなったら、まさしくインディアンたちの出番ではないか」と言った。また、ローリング・サンダーも、「アメリカ・インディアンであるとは、血の問題ではなく、生き方の問題である」と言っている。

クリー族に伝わる「虹の戦士」という言い伝えでは、「ある日、白人の強欲が理由で、河の魚が死に、空からは鳥たちが落ち、水が黒ずみ、木は姿を消し、人類が生存の危機を迎えた時、個人や社会や地球が健康を回復するために必要な、神話や物語や伝統文化や古代からの儀式や太古から伝わる風俗習慣を守り続けた者たちが必要とされる時が来る。人類の生存の鍵を握る者たちがその人たちで、彼らこそが虹の戦士である」となっている。

この物語こそが、アメリカ・インディアンの権利回復と精神復興運動の引き金を引いた物語であり、それと同時に、地球環境に対する意識を高め、環境保護運動に火をつけた物語でもある。

「虹の戦士」の物語は、単に環境保護という目的のためにのみ語られ続けたわけではない。環境問題が、実は人間の心の問題であることを理解して、人間とは何か、地球とは何か、生命とは何か、生きるとはどういうことか、そうしたことを行動哲学の根底に据える現代の-良い意味でのニューエイジ的な-「自己と社会と地球の癒しを求める」運動のほとんどが、どこかでアメリカ・インディアンの影響を受けていることを考えれば、21世紀の重要な運動の全ては、この物語から始まっていると言ってもいいのかもしれない。これは、いうならば浄化の時の到来を宣言した書であり、のちに世界を変えることになる物語なのだ。

ところで、「虹の戦士」は口承伝承なので、様々なバージョンがあるが、教えの中心は変わらない。短いバージョンのものをここに紹介する。

「虹が何か知っているかな？ さよう、大空にかかる美しい色をした弓のことだな。戦士とは、勇気ある者のことたちのことだ。恐れる代わりに、勇気を持つ者たちのことだ。我々の一族にはこんな話が伝わっている。焚き火の火でも見つめながら、聞いてもらいたい。

いつとはわからないが、これはこれから起こることの話だから、注意して聞くがいい。いずれ、将来、動物たちが姿を消し始めるだろう。人々は狼の姿も目にすることがなくなる。熊も、鷲も、見なくなるだろう。姿を消し始めるのは、動物ばかりではないぞ。大きな木たちもまた消えてゆく。人々は互いに争うことばかりで、愛し合うこともなくなるだろう。空にかかっていた美しい虹も色あせ、人々はもう虹を目にすることもなくなるだろう。そして、そうなった時、そこに一群の子供たちが現れる。この子供たちは動物を愛する。消えた動物たちを呼び戻すことになるだろう。この子供たちは木を愛し、もう一度大きな木を呼び戻すことになるだろう。この子供たちは人間として互いに愛し合い、もう一度人々がみんな互いに平和に暮らせるようになることに力を貸すことになるだろう。この子供たちは、空にかかる虹を愛する。もう一度大きな虹を大空に呼び戻してくれることだろう。だからこそわれわれインディアンたちは、この子供たちのことを「虹の戦士」と呼ぶのだ。

そこで、一つみんなに質問したい。君たちは、動物が好きかな？ それとも嫌いかな？（僕たちは動物

が好きです。)では木はどうか？木は好きかな？嫌いかな？(僕たちは木が好きです。)人間はどうだ？人間は好きかな、嫌いかな？(僕たちは人間が好きです。)では君たちは虹は好きかな？それとも嫌いかな？(僕たちは虹が好きです。)そうかそうか。動物が好きで、木が好きで、人が好きで、虹が好きか。それならば、君たちが、虹の戦士なのだ。虹の戦士として、勇敢に生きなくてはならない。

アメリカ・インディアンに対する関心の高まりと、自己再発見を通しての社会環境や地球環境への意識の高まりは、それがファッションや単なる病気治しにとどまらない限り、必ず一緒に訪れることになっている。今では「癒し(ヒーリング)」という言葉が、時代のキーワードのようにになっているが、もともと「癒し」とは「病気治し」や「利己的なリラクゼーション」に留まるものではなく、常に「自己と社会(共同体)と地球」の三者が一つになっていることを理解し確信した上でもたらされるものなのである。自分を癒すことが直接的に社会や地球そのものを癒すことにつながっていることを知らなくてはならない。この繋がり、環を、どこかで断ち切ってしまったら、それは癒しなどではない。つまり、これは逆も言えることであり、地球や社会が汚れて病気になるとしたら、それは「あなた」や「私」が汚れて病気になることでもあるのだ。

エコロジー運動には様々なルーツがあるが、その一つの根にあたるものに(中略)、アメリカ・インディアンと呼ばれる人々の、地球を生きている存在として、すべての生命の母親として見、すべての生命あるものを兄弟姉妹と見る神秘主義的な認識の仕方があった。これは、文字で書いたものを頭で理解するのは異なって、実際に地球がそのように-母親として、意識を持った生命体として-、見えている、花や草や鳥谷動物たちが仲間に見えているということ、どうかハートで理解していただきたい。理解するというよりは、直感で認識していただきたい。この点では、地球を非生命体として見る近代科学的世界観とは、もともと視点が180度も違うのだから。

環境運動が高まりを見せるところ(特にドイツ)では、数千年から数万年の間地球の環境に大きな変化を与えることのない生活を送る技術と知恵を持っていた「地球の守護者」としてのアメリカ大陸先住民に対する関心が高い。

地球上に点在して、いまだに先史時代からの英知を守り続けてきた先住民たちが、互いにコミュニケーションをとりながら情報を交換する時代が到来しつつある。1960年代に始まった人間性回復運動がもたらした最大の恩恵は、我々はもし望むなら生き方そのものを変えることができるという確信だったのではないか。自分たちが持ち続けた世界観の限界を超えた物の見方の力を借り受けることによって、我々は自分たちの生き方をもっと意味あるものへと押し上げることも不可能ではない。

アメリカ・インディアンの生き方を学ぶことで、私たちなら、一人の地球に生きる人間であるとはいかなることかを学び直すことができる。与えられた人生に恐れを持たずに立ち向かうこともできるだろう。

参考文献：北山耕平翻案、『虹の戦士』、太田出版、1999年。

2017年1月27日3時限、大学講堂で「世界の宗教」(谷口智子が担当する一般教養科目)受講者に、坂口火菜子『虹の戦士』の語りを見せた。舞台を見た感想を自由に書いてもらったところ、およそ159名の学生が、「大変感動した。民族楽器の演奏(じぶこんによる演奏)を始めてみた。鳥の声や自然の音のようだった。演技者(坂口火菜子の一人語り)も一人何役もこなして、その演技力に驚いた。ネイティブアメリカンの歴史や現在置かれている状況などが初めて実感としてわかった。ネイティブアメリカンの宗教文化や世界観に興味があった。いろんな宗教があるのだなと思った。」などおおむね好評な意見が多かった。環境問題に対する意識が変わった、本物の語りを見た、大学の講義でこんな本格的な演劇(語り)を見せてもらえたことに感動した、谷口先生に感謝する、などという意見もあった。

カナダや北米、中南米の先住民宗教や文化を研究する谷口としては、自らが坂口火菜子の『虹の

戦士』を見たくて大学に招聘したのだが、若い学生たちが本物に触れるとやはり感受性が鋭いので、いろんな大事なインスピレーションを感じとるのだな、もっといろいろな体験をさせたいな、と思った。若い学生たちが先住民文化や世界の宗教に触れる本物の体験をさせることの重要性を感じた。そして私たちは新しい世代に環境教育や多文化共生について種まきをする必要がますますあると思った。

